

<b>アシタバ「東京スカーレット」の生産性評価</b> ～「東京スカーレット」の栽培特性を明らかにしました～			
アシタバ「東京スカーレット」の春から秋に収穫された4年生株の生葉や、3年生株の加工用収穫葉のカルコン量は、青軸系統に比べて多くなることがわかりました。また、年間窒素施肥量を多くすることによって、採種量が増えることが明らかになりました。			
実施機関	大島事業所	事業名	伊豆諸島における農業振興技術対策

(背景・ねらい)

平成31年2月に品種登録されたアシタバ「東京スカーレット（以下、スカーレット）」の普及に向け、栽培期間中の収量や収穫葉のカルコン類含有量を明らかにしました。また、効率的な採種を行うことを目的として、窒素施肥量が採種量に及ぼす影響を調査しました。

(成果の内容・特徴)

① 栽培期間中の収量と、収穫葉のカルコン類含有量

「スカーレット」生葉の収量は、冬期に青軸系統（以下、青軸）より少なくなる月が認められたものの、それ以外の月では系統間差はありませんでした（図1）。加工用葉の収量についても系統間差はなく、いずれも3年生株で収量が増加しました（図2）。「スカーレット」生葉の葉柄のカルコン類含有量は、3月から9月にかけて青軸と比較して多くなりました（図3）。「スカーレット」の加工用収穫葉の葉柄のカルコン類含有量も、青軸より多いことが明らかになりました（図4）。

春から秋にかけて収穫された「スカーレット」の生葉は、カルコン類含有量が多くなることが確認できました。収穫量が多く価格が低下する春期において、高カルコンであることは販売上有効な付加価値となります。また、3年生以降の「スカーレット」抽苔株からの収穫葉は、青軸よりもカルコン類含有量が高く、加工材料としての利用価値が高いことがわかりました。

② 年間窒素施肥量の採種量に対する影響

2年間の採種量は、3倍区で一番多くなり慣行区と比べて20%程度増量しました（表1）。また、2倍区及び3倍区は、2年生株時の採種量が慣行区よりも多くなることが明らかになりました。

このように、年間窒素施肥量を多くすることにより、採種量を増加させることができます。採種するには、小面積でも十分な種子量が確保できるため、肥料以外の使用資材コストはほとんどかかりません。そのため、自家採種の場合、年間窒素施肥量を多くしても種子の価格を通常購入価格より安くすることができます（表2）。

(成果の活用と反映)

平成30年度から現地実証試験を開始しています。現地実証試験で得られたデータも参考にし、生産者が「東京スカーレット」を栽培、採種する上での最適な栽培方法を確立して現場普及を進めていきます。

(澁澤 直恵)

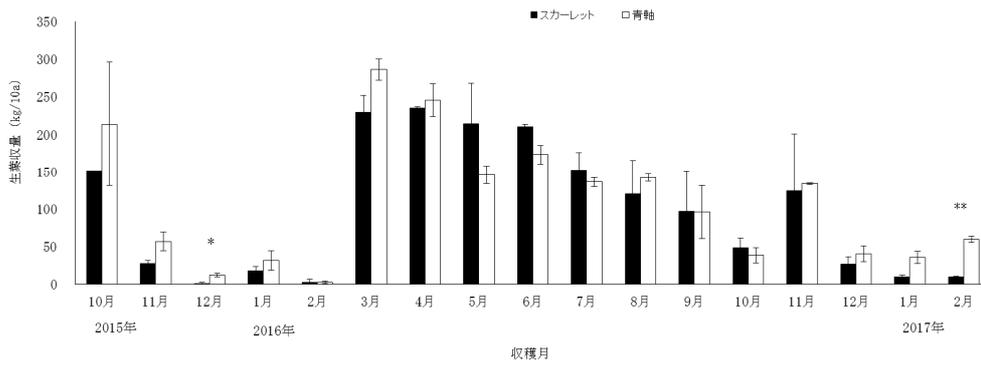


図1 生葉収量の月別推移

図中のバーは標準偏差を示す (n=2), \*\*は1%、\*は5%水準で有意差あり, 無印は有意差なし。

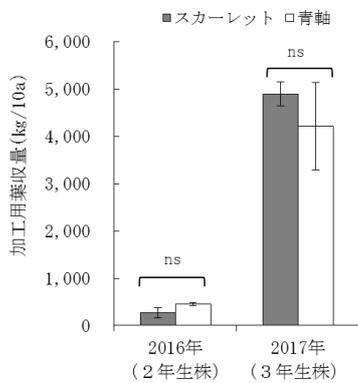


図2 抽苔株葉の収量 (6月)

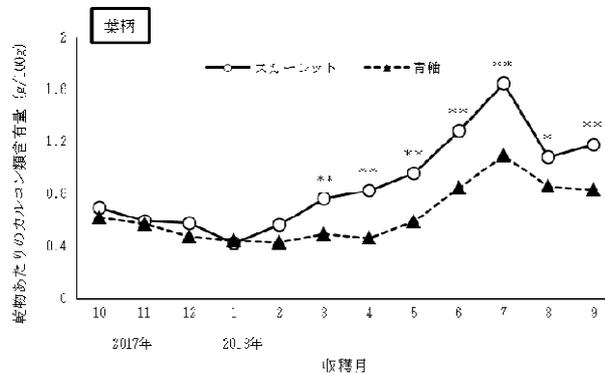


図3 4年生株生葉の葉柄のカルコン類含有量月別推移

\*\* および\*は, 1%および5%水準で有意差あり (n=2)

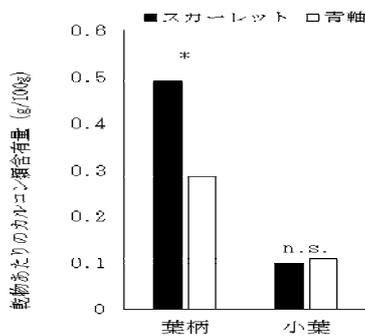


図4 4年生抽苔株収穫葉の葉柄および小葉のカルコン類含有量

\*5%水準で有意差あり, n. s. は有意差なし。

表1 異なる年間窒素施肥量が抽苔率と採種量に及ぼす影響

試験区	抽苔率(%) <sup>a</sup>		採種量(mL/m <sup>2</sup> ) <sup>b</sup>		合計	採種量比 <sup>c</sup>
	2年生株	3年生株	2年生株	3年生株		
慣行区	36	32	202	153	355	100
2倍区	45	24	254	105	359	101
3倍区	45	36	289	144	433	122

a) 抽苔率 採種終了時の抽苔率 b) 1 mLあたり約200粒

c) 慣行区の合計の採種量を100とした場合の合計の2倍区, 3倍区の採種量

表2 1升当たりの価格

1升(1.8L) あたりの価格 (円)	スカーレット				八丈青軸 (購入種子) <sup>a</sup>
	年間窒素施肥量				
	慣行区	2倍区	3倍区		
	605	965	1265	8000	

a) 人件費, 諸費用が含まれる。